

組織目標評価報告書（平成22年度）

部局名： 薬学部

組織目標		達成状況(成果)
（ 下記3項目について、特に目標とする客観的指標がある場合は、数値データを引用して記載してください。 ）		
教育	<p>1) 薬学部ディプロマポリシーを策定し、カリキュラムポリシーの策定に取組む。</p> <p>2) 薬学科(6年制)5年次学生の長期実務実習(病院実習および薬局実習)を実施すると共に、本実習内容の改善を講じる。</p> <p>3) 薬学実務実習事前学習を実施すると共に、本学習内容の改善を講じる。</p> <p>4) 創薬科学科(4年制)の教育内容の充実をはかると共に、卒業生の出口保証となる学力確認試験を実施する。</p> <p>5) 薬学教育評価機構が定める第三者評価基準に準じて、薬学科の教育内容を評価する自己点検・評価書の作成へ向けて準備する。</p> <p>6) 薬学教育充実のためのより有効な手段として、教員活動評価法の改善に努める。</p> <p>7) 一般社会や高校等に対する広報活動や講演活動等をさらに進め、薬学領域の社会に対する貢献度を広く認知してもらうと共に、優秀な学生の確保に努める。</p> <p>8) FD活動をより活発に展開し、更なる教員の意識向上に努める。</p>	<p>1) 薬学部、薬学科及び創薬科学科のディプロマポリシーを策定し、カリキュラムポリシーの策定を開始した。</p> <p>2) 病院実務実習をⅠ～Ⅲ期で、薬局実務実習をⅠ期およびⅡ期でそれぞれ11週間ずつ実施した。本学病院薬剤部および岡山県薬剤師会との円滑な連携体制が構築できた。来年度の薬局実務実習は岡山県薬剤師会の協力を得てⅠ～Ⅲ期で実施することとなった。実習内容の改善についてはⅢ期実習の終了(3月25日)後に協議することとなる。</p> <p>3) 薬学科4年生を対象に薬学実務実習事前学習を実施し、実務実習前の基本的な薬剤師技能を習得させた。一部、SGD(スモールグループディスカッション)項目に関して内容を精査する必要があると考えられ、次年度に改善を行なうこととなった。</p> <p>4) 創薬科学科の学生が受講できる授業を新たに3科目開設し、教育内容の充実をはかった。また、卒業生の出口保証となる学力確認試験を実施し、39名の受験者全員が合格した。</p> <p>5) 平成23年度に薬学教育評価機構が実施する第三者評価トライアルの実施校(全国で3校、うち国立大で1校)に推薦され、受諾した。これに向けて、平成23年5月に提出する「薬学教育自己評価・点検書(トライアル評価版準拠)」添付資料および基礎資料の作成に着手し、作成をほぼ終了した。</p> <p>6) 教員活動評価における上位査定枠を職位毎に分配する、教授の研究と管理・運営の重みを変更するなどの改善を行った。</p> <p>7) 薬学部ホームページの全面改訂、薬学公開講演会の開催(2回)、薬用植物園の公開(2回)、大学訪問の受入れ(16校)および出前講義(11回)等により一般社会や高校生に対する広報活動や講演活動を積極的に進め、入学試験志願者倍率が上昇した。</p> <p>8) 薬学部FD部会を4回、薬学部FDフォーラムを2回開催し、教員の意識向上に努めた。</p>
	達成度:	
研究	<p>1) 平成22年度特別経費プロジェクト「難治性感染症を標的とした創薬研究教育推進事業」を推進する。</p> <p>2) インドにおける新興・再興感染症拠点を基盤として、感染症研究の進展を図る。</p> <p>3) 国際共同創薬基盤センターを設置し、国際交流研究や創薬研究の推進を図る。</p> <p>4) 科学研究費補助金の獲得や共同研究費、受託研究費、奨学寄付金等の外部研究資金の増加に努める。</p> <p>5) 化学物質の安全管理や研究室の安全性を高める取組みを行う。</p>	<p>1) 平成23年2月に「第1回難治性感染症を標的とした創薬研究教育推進事業に関する国際シンポジウム」を開催し、本年度の成果報告並びに招待講演を行った。また、中国(上海中薬大、内蒙古大および昆明植物研究所)、韓国(國光大学、梨花女子大)、インドネシア(ハサスディン大学)並びにガーナ(ガーナ大学)と大学間あるいは部局間協定を結び、国際共同研究の推進基盤を構築した。</p> <p>2) 国内の8大学および2研究機関と共に、本年度から開始された文部科学省「感染症研究国際ネットワーク推進プログラム」に参画し、インドの本学新興・再興感染症拠点を中心となって、コレラ等の腸管感染症に関する国際共同研究を推進した(代表者:三好伸一教授)。また公開講演会「インドからみた腸管感染症」の開催などのアウトリーチ活動を行った。</p> <p>3) 上記「難治性感染症を標的とした創薬研究教育推進事業」の国内研究拠点となる「国際共同創薬基盤センター」を薬学部内に設置した。その組織は5つの基盤研究部門(シニズ化合物創製部門、オミクス研究部門、ファーマコメタボローム解析部門、生物活性・毒性研究部門および前臨床・臨床試験部門)とそれらを統合する統括部門からなり、医歯薬学系の研究者が配置され、国際共同研究・創薬研究を開始した。</p> <p>4) 科学研究費補助金および共同研究の件数、金額が共に昨年度より増加した。</p> <p>5) 化学物質の安全管理のため、2名の教員が3ヶ月に1回の割合で学部内全研究室における毒劇物の保管・管理状況を点検した。</p>
	達成度:	
社会貢献	<p>1) 薬剤師や一般人を対象に薬学公開講座を開催し、薬学に関する最新情報の提供と知識の向上に努める。</p> <p>2) 高校生や一般人を対象に薬学公開講演会を開催し、薬学に関する社会の認識を高める。</p> <p>3) 高校生や一般人に薬用植物園を公開し、社会の薬用植物への関心や理解を高める。</p> <p>4) 大学訪問や高校への出前講義等の高大連携を積極的に推進し、高校生の薬学教育への理解や関心を高める。</p> <p>5) 薬剤師会等と連携し、薬剤師の生涯学習に貢献する。</p>	<p>1) 薬学公開講座を開催し、参加者は28名であった。</p> <p>2) 薬学公開講演会を2回開催し、参加者は1回目51名、2回目14名であった。</p> <p>3) 高校生や一般人を対象に薬用植物園の公開を2回実施した。また、オープンキャンパスおよび高大連携での大学訪問の際に高校生に対して、薬用植物園の案内を行った。さらには、NPO法人十葉会会員への案内も行った。</p> <p>4) 大学訪問は多くの高校生に参加していただくために、同一日に複数の高校を受け入れた。その結果、平成21年度の9校から平成22年度は16校へ大きく増加した。出前講義等の回数も11回実施し、積極的に進めた。</p> <p>5) 学内COE教育研究プロジェクト「地域医療に貢献できる薬剤師卒業後の基盤形成」(代表者:波多野力教授)の一環として、薬剤師研修セミナーを2回実施した。1回目(講師:外科医狭間研至先生)には150名の、2回目(講師:本学医療教育統合開発センター寺戸通久先生)には22名の参加があった。また、医療教育統合開発センター主催の「模擬患者参加型教育フォーラム in 岡山」に協力し、参加者は80名であった。</p>
	達成度:	
評価の客観的指標・定義	事項	定義(抜粋)
	学部入試倍率	評価年度の前年に実施した入試と評価年度に実施した入試の志願倍率 算出方法:前期入試、後期入試、AO入試及び推薦入試毎及び各入試の合計により算出した「志願者÷募集人員(小数点3位を四捨五入)」の数値
	大学院充足率	評価年度と評価年度の翌年度の充足率 算出方法:4月入学者の「入学定員÷入学者数(小数点3位を四捨五入)」の数値。
	留年・休学・退学者数	評価年度と評価年度の翌年度の留年・休学・退学者数 留年:正規の在学年数を経過したにも関わらず卒業延期となっている者
	就職率	評価年度のデータが揃わないこと等が想定されるため、比較可能な直近3年程度の推移・傾向から判断する。
	科研費申請率、科研費採択率、採択金額	評価年度の前年と評価年度に実施しているとして公表した共同研究及び受託研究件数、受入金額
【自己評価総括記述欄】※目標及び指標の達成状況について総括し、次年度に向けた改善点を記載してください。		
<p>薬学部棟の第Ⅱ期耐震改修・新築工事のため多くの研究室が一時移転中という厳しい状況の中で、全教職員の努力により教育、研究および社会貢献のいずれの分野も当初の目標を達成できた。平成23年度は6年制薬学科の学年進行の最終年度であり、4年制創薬科学科と合わせてこの6年間における教育の検証を行い、平成24年度からのカリキュラムの改善へ向けて準備する予定である。また、平成23年度に実施の薬学教育評価機構の第三者評価トライアル実施校に採択されたため、早急に準備を進める必要がある。さらには、平成23年4月の戻り移転後の教育・研究環境を速やかに整備し、遅滞なく本学部の教育研究の進展を図らなければならない。</p>		

【達成度】4:非常に優れている 3:良好である 2:概ね良好であるが改善の余地あり 1:不十分であり改善を要する

注)本様式は一般的な学部・研究科用であり、部局の特性に合わせて設定した領域・指標により修正してください。